

デ・キリコ、ハンマースホイ、ホッパー：絵画の思い出

小嶋祥三

この三人は私が好きな画家だ。ちょっと変わった嗜好かもしれない。かれらの絵には私を惹きつけた共通のものがあるはずだ。それを探っていこうと思う。それは自分を語ることもである。タイトルには私が知った順番に画家を並べたが、かれらが生きた時代を生年順に並べると、ハンマースホイ(1864-1916)、ホッパー(1882-1967)、デ・キリコ(1888-1978)で、デ・キリコが一番若い。これは意外だった。デ・キリコがあの一連の不思議な絵を描いたのは主に1910年代だが、ハンマースホイは1890年代にはあの部屋の絵や、誰もいない風景を描いている。ホッパーは「線路わきの家」を1925年に描いた。その時、ハンマースホイはすでに亡くなっており、デ・キリコは方向転換していた。以下、私が知った順番に思い出を述べてみる。

ジョルジョ・デ・キリコ

私がデ・キリコの絵を初めて観たのは高校生の時だった。今となっては思い出せないが、画集か美術雑誌で知ったのだろう。クラスになじめなかった私は、図書室で美術書を借り出し、誰もいない屋上に座り込んで、絵を眺めていた。飽きるとひっくり返って空を眺めた。秋など、紺碧の空に吸い込まれるような気がした。その中でデ・キリコの絵に出会ったのだろう。私がかれの絵の魅力に引き込まれていった。なぜ、そうなったのだろうか。



デ・キリコの絵は道具立てが決まっている。アーケード、広場、彫刻、塔、汽車、暗い空、斜光、影、実在感のない人物。上の絵「予言者の報酬」にはその多くが含まれている。下の絵「イタリアの広場」では汽車の代わりにヨットが描かれている。無機的で舞台のような風景、人工的で極端な光と影、静寂、静止した時間。かれの描く風景が現実にあると

は思わない。しかし、シュールレアリストがそうであったように、われわれを惹きつける。現実でない以上、われわれの側にある。われわれは様々な考えを絵に投影させる。現実の世界では時間が止まることは起こらない。起こったらそれは死だ。生きて静止した時間を感じることは、現実を離れ、別の世界にさまようことだ。かれの絵を観て、人は別の次元の世界に入り込む。



私は外部世界の変化が苦手だった。中学校では毎年クラス替えがあったが、最初の学期は周囲に目移りして、勉強どころではなかった。秋になってようやく落ち着いた。新しい環境に慣れるのに時間がかかるのだ。毎日同じ生活をするのは苦痛でない。よく散歩をするが、見知ったところが多い。環境が変化する旅行は苦手だ。このようなつまらぬ楽屋裏を書いているのは、私には現実とは異なる別の世界への興味があるようだとはいいたからだ。そのためには静寂で時間が止まっていることが好ましい。いろいろな点で不安定な高校時代（受験産業？など、受験生を食い物にしているとしか思わなかった）、現実の世界になじめず、それから逃走、逃避するにはピッタリの世界をデ・キリコは提供してくれたのだろう。基本的なところは変わらないのだろうが、世の荒波？にもまれ、70歳になるうとする現在、デ・キリコに対して若い頃のような熱狂はない。なお、ダリ、マグリット、デルヴォーには、デ・キリコ体験が強烈過ぎたのか、それほど心惹かれなかった。

デ・キリコはハンマースホイの絵を見たことがあるだろうが、影響を受けたかはわからない。ただ、ハンマースホイの建物の背後にある帆船の絵はデ・キリコの絵と全く異なるが、受ける印象はよく似ている。

ヴィルヘルム・ハンマースホイ

国立西洋美術館のハンマースホイ展を観にいった。この展覧会についてはNHKが放映し

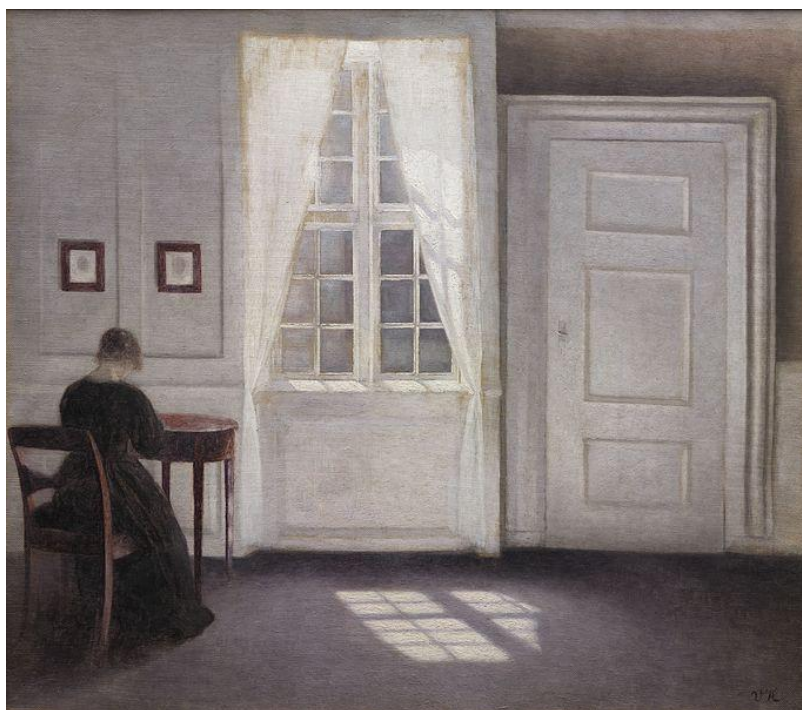
ていたので、かれの絵についての知識は持っていた。私が抱いた印象の一つは、これらの絵が心理検査の絵画統覚検査（TAT）図版に使えるそうだということ。私は大学で心理学を学んだので、級友の依頼で心理テストをしばしば受けた。TAT もやったが嫌いではなかった。TAT は様々に解釈できる人（々）の日常の一コマを絵にしたもので、その絵に基づいた物語をつくることが求められる。私は物語性が希薄で、自由な解釈が可能な図版が好きだった。私が語る物語は、いつの間にか図版から離れてしまい、勝手に広がるのだった。



ハンマースホイの絵は観る側のさまざまな解釈を誘う面がある。描かれているものは劇的なものでなく、まったく「日常的」なものである。この点で、人工的、無機的なデ・キリコとは大きく異なる印象を与える。上の絵（「陽光、あるいは陽光に舞う塵」）では部屋に陽が差し込んでおり、床を反射した光は壁やドアを照らす。このドアにはノブがあるのだろうか。ドアを開けてその先を見たいと思う人がいるかもしれない。しかし、ドアの向こうにも同じような空間があるだけだろう。あるいは、街が広がっているかもしれない。しかし、そこには誰もいない。生活感などない風景だ。私はこの部屋に留まる。静寂、そして現実から切り取られ時間が静止した異次元に。

ハンマースホイの部屋には人物がいることがある（下の絵「ストランゲーゼの画家の家」）。

しかし、後ろ向きが多く、こちらを向いている場合でも、うつむいていたりする。要するに、はっきりと分らないようになっており、実在感、生活感は薄い。観る側はいろいろと心を投影できる。異次元の部屋に現実的な人物がいては困る。この絵は左のカーテンの影がない。現実の光景ではないことを示しているのだろうか。しかし、私にはどうでもいいように思われる。内部指向の人間は現実的な外部世界が苦手である。

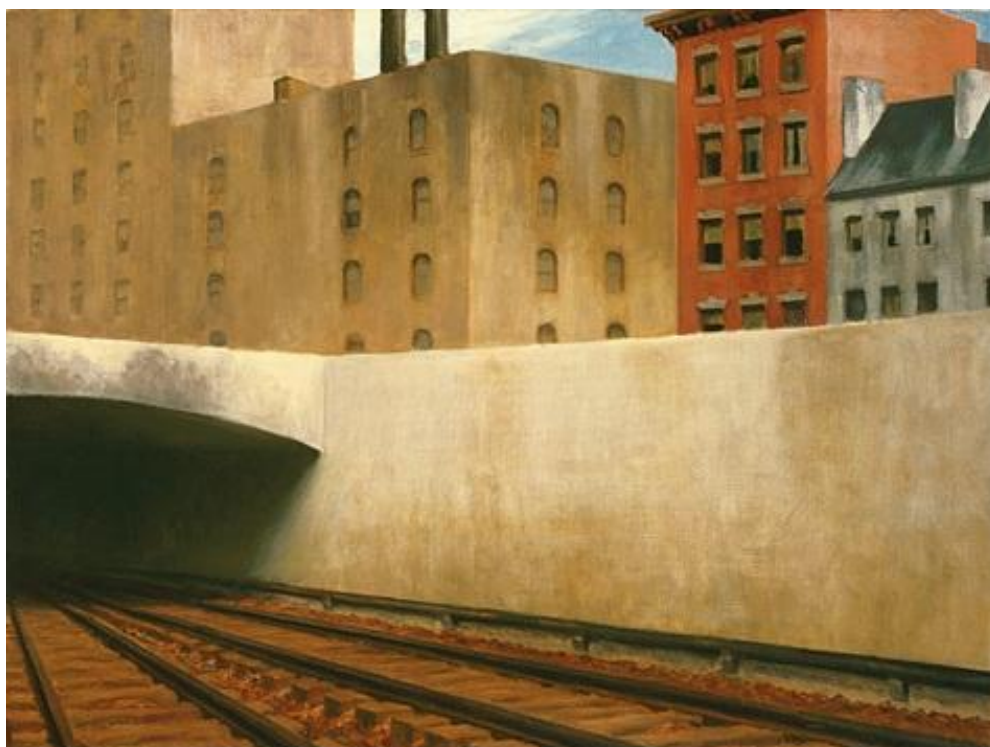


ハンマースホイは恐らくデ・キリコの絵を知ることなく、あるいは知っていても影響を受けることなく描いていた。しかし、様々な解釈を可能にする、静寂、静止した時間、現実の世界とは異なる別の世界、これらは二人の画家に共通している。なお、フランスに滞在したことがあるホッパーはハンマースホイやデ・キリコの絵を知っていただろう。

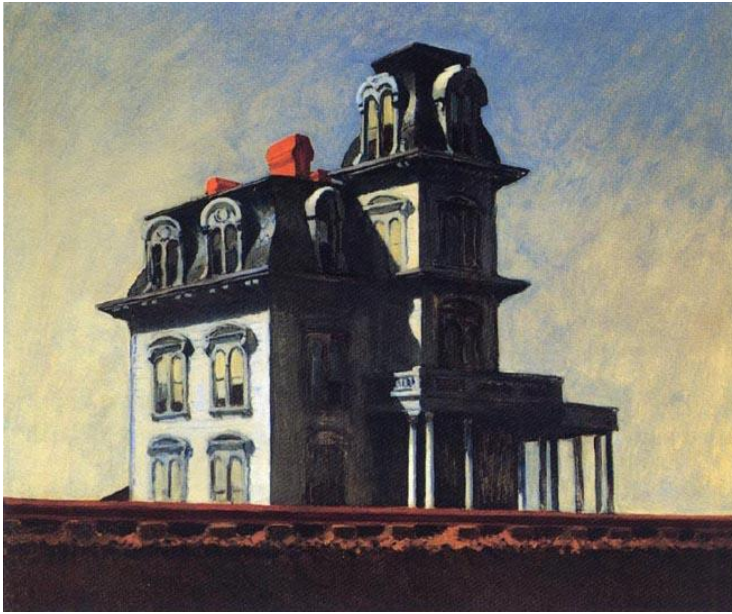
エドワード・ホッパー

国立新美術館にフィリップス・コレクションのアメリカ人画家の絵を観に行った。私のお目当てはエドワード・ホッパーである。「日曜日」と題する絵がポスターになっていたのも、それはすぐに眼に入った。都会における孤独、寂しさが見事に表現されている。しかし、それだけではなく、ある種の不気味さ、異様さも感じられる。たった一作かと拍子抜けする思いで、会場を回っていた。すると鉄道を描いた絵に釘付けになった（下の絵「都会に接近中」）。画面の左手に地下に潜る線路の薄暗い入口が不気味にあいている。この不気味な感覚は高校生の頃、渋谷区初台にある建物の入り口をみたときに経験したものだ。その建物は現在「初台青年館」というらしい。当時、甲州街道に沿って京王電鉄が走り、

その向こうに玉川上水が通っていた。建物は小学校の横にあり、上水沿いの道に面して建っていた。入口は高くアーチ状になっており（デ・キリコ!）、階段を上って中に入るようになっていたと記憶している。甲州街道越しにこの薄暗い入口をみたとき、急に不気味な感じがして、ゾクッときて鳥肌が立ち、足が止まった。絵をみた時にこの感覚がよみがえり、作者の表示を見たらホッパーだった。



ホッパーの絵は、ハンマースホイと同じように、現実の世界を描いている。しかし、強調された光と影はデ・キリコを思わせる。下に掲げた「線路わきの家」は光と影のコントラストが強く、異様で、不気味である。ヒッチコックの『サイコ』で舞台となった建物も気味がわるかったが、ホッパーの絵から着想を得たようだ。灯台の明るい絵を観ても、灯台自体デ・キリコを思い起こさせるし、どことなく不気味な印象も漂う。ハンマースホイと同じように、ホッパーの風景画には人物がでてこないことが多いようだ。無人の室内を描いた絵は明るい陽が差し込み、ハンマースホイを思わせる。かれの絵にはしばしば人物が登場する。一人のことが多い。「日曜日」では店の前に座ってうつむいて地面をみている人、「晩秋」では箒を持って前方を見ている人がいる。しかしその前方に何があるかこの絵の鑑賞者には見えない。これらの人は孤独の印象が強い。有名な「夜更かしする人々」のように複数の人物が描かれている絵もある。しかし人物はそれぞれ孤独でバラバラの印象である。この辺りはハンマースホイに似ており、TAT 図版のようだ。



ホッパーの絵はハンマースホイのそれよりもさらに現実の社会的な世界を描いている。人物が登場することも多い。しかし、人々は孤独のようだ（下の絵「C客室」）。私は自分の身の上に起こっていることに現実感を持ってないような傾向がある。子供の頃の記憶はなぜか一人の時の記憶が多い。それなりに世を渡ってきたが、基本的なところは変わらないだろう。ホッパーに惹かれるのは人物が孤独でこちらに語りかけてこないからだろうか。



最後に、ここに表示した絵の掲示に問題があるのなら、いつでも削除します。